

金武町の村落と聖地

— 屋嘉区の場合 —

金武町教育委員会

発刊に寄せて

金武町教育委員会

教育長 仲 田 和 夫

このたび本書を刊行するにあたり一言ご挨拶申し上げます。

金武町教育委員会では、平成2年度において金武町の御嶽と集落の変遷について調査を実施してまいりました。この企画は、御嶽と集落の祭祀を調査する事によって、金武町の歴史と集落の変遷を民俗学的に把握し、明らかにしようとするものです。本報告書は町内の御嶽や祭祀場所の踏査および各集落の古老からの聞き取り調査をはじめとする今日までの研究成果のうち、伊芸区につづいて（既刊）屋嘉区についてまとめたものです。

これにより本町の歴史・文化に対する理解が一層深まり、文化行政の円滑な推進と文化の高揚に少しでも役立てば幸いに存じます。

本書の刊行には、執筆をして戴きました琉球大学の津波高志助教授をはじめ琉球大学名誉教授の仲松弥秀氏とその他津波研究室の学生の方々との調査の段階からの御尽力の賜ものであり、厚く感謝申し上げます。又、調査に御協力戴きました屋嘉区長の仲間清氏および屋嘉区民の皆様にあかく感謝申し上げます。

目 次

発刊に寄せて	1
1. 集落形態と伝承村落史	5
(1) 集落形態	5
(2) 伝承村落史	11
2. 聖地と旧家	16
(1) 御 嶽	16
(2) 根 屋	17
(3) 拝 泉	18
(4) 世果報神と鍛冶屋跡	19
(5) 旧 家	20
3. 神人と年中祭祀	23
(1) 神 人	23
(2) 年中祭祀	24
写 真	27
引用文献	40

1. 集落形態と伝承村落史

(1) 集 落 形 態

屋嘉は金武町の西の端に位置している。方言でヤカと称され、東隣の伊芸とはイジ・ヤカと連称もされてきた。伊芸同様、金武湾に面する風光明媚なシマである。平成3年10月現在の人口は男性700人、女性687人、計1,387人で、世帯数(戸数)は392世帯である。

大ざっぱに言えば、屋嘉の集落は三つに分かれている(地図1参照)。

一つはメーブックガーラ(前袋川)とメーダガー(前田川)の間にあって、最も規模の大きい塊状の集落である。世帯数にして250世帯である。村落祭祀にかかわる聖地や旧家は全てこの集落内か、その周辺にある。普通、土地の人々の用いる「部落」とは、この集落を指している。以下、便宜上それを本部落ないし本集落と記す。

もう一つは、本集落の西南側に前田川を隔てて相対する集落である。形態上は本集落と同じく、塊状をなしている。が、今日見るような集居集落としての成立はきわめて新しく、戦後になってからである。戦前は数軒のヤードゥイ(屋取集落)があっただけである。現在では本集落からの移転者、分家者で103世帯にもなっている。土地では部落と区別して、「南部落」と称している。小字区分ではカキマタバル(嘉喜又原)である。小字名がそのまま集落名として用いられることもある。

南部落と石川市との間の国道沿いにも家屋が点在している。行政区としてはそこも屋嘉区に入ることは入る。が、比較的最近形成された地域で、どちらかといえば、景観上は石川市の市街地の延長という観を呈している。また、村人としての社会関係の側面から見ても、南部落のように本集落からの移転者、分家者たちが住んでいるわけではないので、その発展・拡大地域ではない。やはり、市街地の延長し、拡大した地域である。世帯数は39世帯である。

なお、今日の行政班は本部落が四つに区分され、南部落が二つに区分されている。南部落と石川市との間の地域は一つの班で、第7班である。容易に察せられることではあるが、第7班は屋嘉区の諸行事や会合などの参加に最も消極的なようである。以下に述べる屋嘉区の村落と聖地に関しては、第7班は対象外にしていることを断っておきたい。

現在および過去の屋嘉の集落形態(道筋や宅地の平面的構成)を理解するに際して、どうしても避けて通れない問題が一つある。それは戦前の屋嘉部落つまり本部落がさる大戦で灰燼に帰し、戦後屋敷地の線引きからやり直さざるをえない状況にあったという点である。しかも、事情はいささか複雑で、厳密な意味では戦前どおりの集落の復元には至らなかった。まず、そこらの事実関係の経緯を記しておきたい。

地図1. 屋嘉の集落・班区分・聖地



- | | | | |
|-----------|------------------|-----------------|------------|
| ① イースシマ | ⑤ メーブックガーラ (前袋川) | ⑪ メーダ (前田) の旧屋敷 | ⑮ メーダバル |
| ② アガリウタキ | ⑦ トウピナバル | ⑫ 旧ニヤー (火の神) | ⑯ スーケール |
| ③ メーブックバル | ⑧ シナマタバル | ⑬ ウフカー (水の神) | ⑰ 前田川 |
| ④ ユンダーガー | ⑨ イリウタキ | ⑭ 火の神の新しい祠 | ⑱ メーダ (現在) |
| ⑤ 墓地 | ⑩ メーダ門中の拝所 | ⑮ メーヌハマ (前の浜) | |

戦災で跡形もなくなった屋嘉は米軍に接収され、そこに捕虜収容所が建てられた。およそ8千人ほどが収容されたといわれている。ちなみに、その収容所はカンカラサンシン（缶詰の空き缶で作った三味線）で捕らわれの身の不幸を嘆き、望郷の念を歌い上げた琉歌、屋嘉節で有名である。

戦災で跡形もなくなった屋嘉は米軍に接収され、区民は昭和20年5月26日の移動命令によって、既に那覇と中部地区の住民が収容されていた石川収容所に収容された。そして、昭和20年12月6日には隣の伊芸の区民とともに伊芸に移動を命じられた。そこではテント小屋生活ではあったが、家族ごとに暮らすことができた。翌年の12月、屋嘉の人々は前田川の南西側のカキマタルつまり今日の南部の位置に移住が許可された（金武町誌編集委員会 1983：665）。伊芸で使っていたテント小屋を運び、戦後屋嘉の地で生活が始まった。

その翌年すなわち昭和22年、今日の屋嘉恩納線を境にして西側半分の旧集落地が解放された。東側半分が住民の手に戻ったのは、なんとそのさらに33年後、昭和55年のことであった。そのような経過の中で、本部落はかつての屋敷地にかつての家屋配置のまま再構成されたのではなく、それとは異なる形にならざるをえない状況が生まれた。

一つは、本部落の西側が解放された時点で、もともと西側に住んでいた村人はもちろん、東側に住んでいた一部の村人もそこに移り住んだことである。西の御嶽の近辺は部落の共有地だったので、そこを東側の一部の住民に当てがったのであった。それは単に東側住民の混入ということではなく、村落祭祀にかかわる旧家群が村落全体の家屋配置に占める相対的位置の変更を余儀なくするものであった。

もう一つは、本部落の西側に屋敷地を当てがわれなかったかつての東側の住民は、戦前の屋敷地が返還された後もそこに戻らず、カキマタルに住み着いたことである。昭和22年に西側半分が解放されたときは、仮住いのテント小屋から元の集落への嬉しい移動であったので、なんら問題はなかった。しかし、30年余もカキマタルで生活し続けねばならなかった残りの村人にとっては、元の宅地の解放は即そこへの移住を意味するものではない。なぜなら、カキマタルに宅地を購入し、住宅を建てた者がほとんどだからである。結局、本部落の東側の宅地は現在でもほとんど空いたままであり、家が建っている場合でも、カキマタルから引っ越した者ではなく、その分家者が大部分を占めている。

さらにもう一つ、戦前の集落形態との違いを生み出したものに、戦後の土地調査委員会による屋敷地の線引き問題がある。戦争で土地の所有権を証明する一切の書類が消失したので、その書類を作成する必要から昭和21年2月28日付の琉球軍政府指令121号に基づいて土地所有権の申告が開始された。その現地調査のために当初は調査員が金武、伊芸、屋嘉の各字に5人ずつ割り当てられた。しかし、字金武の地籍には並里と中

川が含まれていたのも、5人の調査員では調査困難であるとの理由で、11人に増やし、逆に伊芸と屋嘉の調査員は各2人に減らした（金武町誌編纂委員会 1983：664）。

伊芸からカキマタバルに移された屋嘉の人々は、元の宅地の返還に備えて、土地調査委員会を中心に、宅地の解放に先駆けて、図面上の線引き作業を行った。その作業にあたって、どうせなら戦前よりもきれいに屋敷地を区切ろうということになり、元の面積に関係なく、全ての宅地を一律110坪ずつに分けた。

等面積の線引きを行ったのであるから、当然のことながら、道筋も戦前よりはるかに整然としたものになった。が、逆に解決すべき事柄もいくつか出てきた。まず、全ての者に元の宅地を割り当てるわけにはいかないという点である。村落祭祀にかかわる旧家は特に配慮されたようであるが、それ以外は土地調査委員会の割当に従った。次に、宅地面積の減った者と増えた者との不公平をどうするかという点である。これに関しては金銭で解決した。つまり、増えた者がその面積分の金を支払い、減った者はその分の金を受け取ったのである。

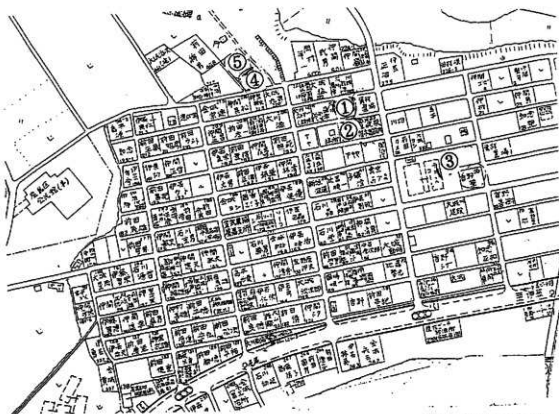
現在の本集落（地図2参照）が見事なまでの基盤目状になっているのは、以上のような戦後における経緯があったからである。戦前の集落形態（地図3参照）と比べると、差は歴然としている。しかし、かといって、戦前の集落形態が雑然としているということではない。戦前も宅地や道筋の平面的構成から見れば、やはり塊状の井然型に分類すべきであろう。仲松の分類では、移動はしているが、その年代不明のゴバン型村落に屋嘉を入れている（仲松 1963：155）。

なお、本部落の中でも、国道329号線から南側の海辺の地域はミージマ（新島）と呼ばれている。戦前は数軒の家があるだけであったが、今日では倍以上になっている。そこは南部落に対する部落という場合や班区分では部落と同じ扱いを受けている。しかし、その名称も示しているとおり、国道の北側はより古く、南側はより新しいと意識されている。

そのミージマに関連して、屋号のミージマ（地図3参照）にもちょっと触れておきたい。後述するように、屋嘉の本集落は前田と屋嘉の2カ村が別々の場所から移動してきてできた集落である。その移動の際に、最も早く移り住んだために、ミージマの屋号がついたとされている。新移住地すなわちミージマに最初に移った家の意でミージマになったというのである。その屋号の由来話は屋嘉の年寄りには一般的に知られている。

現在用いられる地域名としてのミージマは移動後の集落から見たミージマというニュアンスをもっているということになる。つまり、同じミージマでも、屋号のほうはより古く、地域名のほうはより新しいということになるのである。

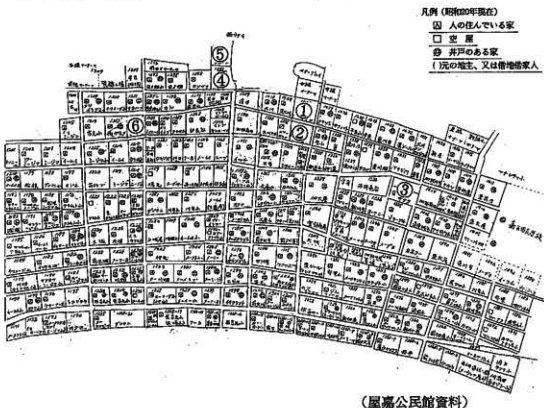
地図 2. 戦後の本集落



(ゼンリン住宅地図)

- ①ヤカドゥンチ (屋嘉殿内)
- ②ウフヤ (大屋)
- ③ニーヤ (根屋)
- ④メーダ (前田) 屋敷跡
- ⑤カンゼーク (金細工)

地図 3. 戦前の本集落



- ① ヤカドゥンチ (屋嘉殿内)
- ② ウフヤ (大屋)
- ③ トゥンチグワー (殿内小)
- ④ メーダ (前田)
- ⑤ カンゼーク (金細工)
- ⑥ ミージマ (新島)

(2) 伝承村落史

戦前においてヤードゥイが数軒あったにせよ、南部落の本格的な集落形成は上記のように戦後のことである。ここで戦前の本部落（以下単に屋嘉と記す）に絞って、土地の人々がその「歴史」をどのように言伝え、説明しているのかを見よう。もちろん、そのような人々の認知としての村の歴史は、文献学的事実と一致することもあれば、一致しないこともあるであろう。それはそれでかまわないのであるが、まるっきり文献のない世界でもないで、伝承を記した上で文献との照合も行いたい。

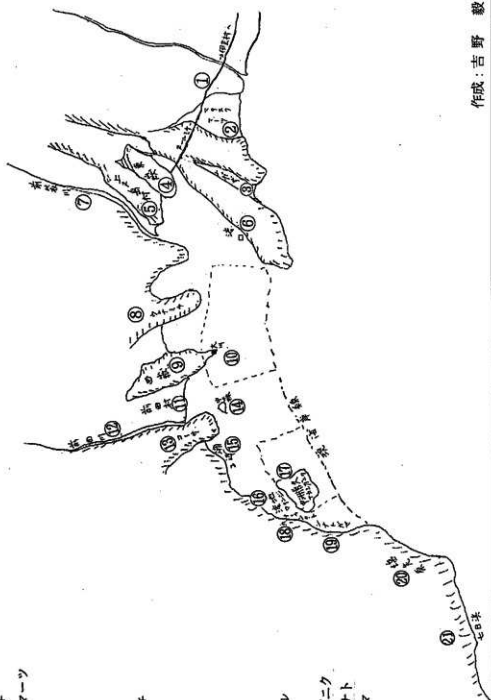
屋嘉がかつて何処からか移動してきたのか、そして幾つかの村が合併し、あるいはいくつかの村に分離して、現在に至っているのかなどという点に関して、数人の古老から得た資料を整理すると、大筋は次のようになる。

- ① 屋嘉の集落の近辺は昔は海で、人の住める所ではなかった。が、しだいに干上がって陸になった。本部落東側にはナチュンジャと称するところがあり、そこはかつて船をつないだ場所である。また、西側のスーケールーは波がうっては返す所の意である。いずれも、かつては海であったことを地名が示している。
- ② 人が住めるような状態になってから、そこに二つの村が移動してきた。一つはヤカであり、もう一つはメーダである。両者は移動してから合併し、ヤカという一つのムラになった。ヤカ・メーダという連称があるのは、二つのムラがあったからである。
- ③ 移動・合併する前のヤカはアガリウガミ（東拝み）ないしアガリウタキ（東御嶽）と称する聖地の背後（北側）一帯にあった。イーヌシマ（上のシマ）と呼ばれている場所である。そこにはナナキブイ（七煙）すなわち7軒の家があった。その7軒の中にヤカドゥンチ（屋嘉殿内）とウフヤ（大屋）という旧家が含まれていたとは聞いたが、その他については知らない。
- ④ もう一方のメーダは移動・合併前にはイリウガミ（西拝み）ないしイリウタキ（西御嶽）と称する聖地の西側にあった。メーダムラに住んでいたのはメーダ門中ないしメーダビチ（前田引き）の人々である。その人々は今日の本集落でいえば、ほとんど西側に居住している。その中にミージマ（新島）と称される家がある。メーダで最初に新地に引っ越したので、その名がついた。

いちいち文末に付けてはいないが、念のために記すと、これらは全て「という」あるいは「といわれている」という伝聞形である。屋嘉のお年寄り全員に確認したわけではないが、屋嘉で生まれ育った高齢者ならば、たいていその程度は聞いて知っているであろうというのが話者たちの一致した意見である。つまり、特別な霊的能力の持ち主や学問をした人でなければ分からないという種類の知識や解釈とは性格を異にする村落史伝承なのである。

図1. 合併前の屋嘉と前田

- | | |
|-----------|----------|
| ① スールミチ | ⑪ ナカシガニク |
| ② マタスクマーツ | ⑫ ナーカンナト |
| ③ ナガザク | ⑬ ナナトガマ |
| ④ 東 嶽 | ⑭ 塩 先 |
| ⑤ 上の島村 | ⑮ 七日浜 |
| ⑥ 渡 口 | |
| ⑦ 前袋川 | |
| ⑧ ウンナミチ | |
| ⑨ 西 嶽 | |
| ⑩ 大 川 | |
| ⑪ 前田村 | |
| ⑫ 前田川 | |
| ⑬ コーサ | |
| ⑭ 中 森 | |
| ⑮ スーケール | |
| ⑯ 渡 地 | |



作成：吉野 毅

もちろん、それははっきりとした時間の分からない「昔」のことである。また、なかには明らかに民間語源説話的な要素も混じっている。それら故の村落史伝承であり、広い意味では一種の「文化としての歴史」（笠原 1991 参照）と捉えたほうが最も正当であろう。しかし、文献と照合すると、きわめてよく符合する点もあり、それらを無視して全てを非歴史的に葬り去るわけにはゆかぬであろう。したがって、次に文献との照合も行いたいのであるが、屋嘉の村落史に関心を抱く地元の吉野毅氏が伝承を踏まえて二村落合併前の大まかな地図を作成しているの、参考までに掲げておきたい（図1）。

沖縄本島・周辺離島の『絵図郷村帳』は1646年に成立したと考えられている「角川日本地名大事典」（編纂委員会 1986：19）それでは金武間切の村を恩納、瀬良垣、安富祖、名嘉真、屋嘉、伊芸、金武、漢那、惣慶、宜野座、古知屋、久志、辺野古、前田、平田、つぶた、はまの17カ村であるとしている。が、同じく17世紀中ごろの史料と考えられている『琉球国高究帳』では恩納、せらかち、あふそ、中間、屋賀、いげ、金武、かんな、そうけ、ぎのぞ、こちや、くし、へのきの13カ村しか記されていない。前田、平田、つぶた、はま4カ村の名は消えるわけである。そして、『琉球国由来記』（1713）のような18世紀以降の史料にこれら4カ村が再び登場することはない。

これらの史料にさらに『球陽』などを加え、文献による研究では17世紀中ごろから18世紀にかけての金武間切の村落についてだいたい次のように見ている。金武間切は『絵図郷村帳』に見るようにもともと17カ村からなっていた。が、後に恩納間切に恩納村ほか3カ村、久志間切に久志村ほか1カ村が編入された。また、恩納間切に恩納村その他が割かれたときかあるいはその後、前田、平田、つぶた、はまの4カ村も廃された。その結果、『琉球国由来記』（1713）の編纂時には屋嘉、伊芸、金武、漢那、惣慶、宜野座の6カ村になった。廃された4カ村については今日の伝承や小字名を考慮して、前田は屋嘉に、平田は伊芸に、つぶたは金武に、ハマは漢那にそれぞれ合併されたとする（東恩納 1950：411角川日本地名大事典編纂委員会 1986：308、稲福みき子 1982：284-285）

史料の記載事項であれ、史料に基づく研究であれ、屋嘉の古老たちの語る村落史とびったり一致する点が一つある。もともと、ヤカとメーダは別々の村であったとする点である。ただし、屋嘉と前田が合併し、屋嘉という一つの村になったことに関しては直接史料に記載されているわけではないので、文献村落史の側で伝承村落史を吸い上げたというのが正確であろう。

ヤカとメーダが別々の村落であったことについては、文献も伝承も見事に一致しているが、二つの村がいつごろ合併したかについては伝えていない。伝承は時間を特定しないし、史料の中でも廃村の事実を伝える『球陽』の記事自体どの村の合併かは明記せず、時間についても曖昧なのである。文献研究では『球陽』の記事から恩納間切に恩納村などを割い

た際（ないしその後）に前田などの4カ村がそれぞれ別の村に合併されたとしているのである。

その点に関しては、もう少し慎重さが必要であると思われる。というのも、『琉球国高究帳』の成立の時期やそれに記された村名をどう捉えるのかということに関して、今一つ釈然としないからである。恩納間切の創設は1673年で、その際に金武間切から恩納村他3カ村が編入されたこと、他3カ村とは瀬良垣、安富祖、名嘉真であるということなどについては異存はない。しかし、前田その他の廃村の時期については、疑問があるのである。

『琉球国高究帳』には金武間切から恩納間切へ割かれたとする村々が金武間切の村として記されていて、逆に前田その他の廃村になった4カ村は記載されていない。この事実から二つのことが分かる。一つは『琉球国高究帳』は恩納間切に恩納村その他を割く以前の金武間切の村落について記していることであり、もう一つは恩納間切創設以前に前田などの4カ村は廃村になっていた可能性のあることである。

第一点目に関しては恩納間切に割かれたことが確実な恩納村などが記されているのであるから問題ないであろう。第二点目に関しては記されていない村は当時なかったという前提で、さらに『琉球国高究帳』の成立年代と恩納間切の創設の時期との間に前田などの4カ村を記した史料がなければという前提が重なった場合である。

とすると、『琉球国高究帳』の成立年代が大きなポイントになる。それは1635年から1648年の間に成立したとみるのが最も有力である（梅木1977:100、高良1981:12-13）。この年代の幅だと、早ければ『絵図郷村帳』（1646）よりもさきに成立したことになる、遅ければそれよりも後に成立したことになる。

『琉球国高究帳』が『絵図郷村帳』よりもさきに成立していたとすると、両者の間のわずかな期間（大きく見積もってもせいぜい10年間）に、金武間切では前田、平田、つぶた、はまの4カ村が新設されたことになる。従来の説のように恩納間切や久志間切の創設（1673）に際して、4カ村が廃村になったとする見方をとるのであれば、『琉球国高究帳』が『絵図郷村帳』よりもさきに成立しておらねばならないことになる。

反対に、『琉球国高究帳』が『絵図郷村帳』よりも後に成立したとすれば、どうであろうか。これまたわずかな期間（長くても2年）に4カ村が他の村に併合されたことになる。これだと、恩納間切の創設以前、少なくとも1648年には4カ村が廃されていたことになる。つまり、廃村に関する従来の見方とは逆になる。

はたして、金武間切に関してどちらが正しいのか私にも判然としない。しかし、土地では村落の分離や新設に関する伝承はなにも聞けないのに対して、合併に関する伝承はきわめて明確に聞ける点にも十分に配慮されねばならぬであろう。そして、伝承の理解の仕方の一つとして、『絵図郷村帳』の項にあった村落の中で4カ村が『琉球国高究帳』の記載

のように後に廃村となったと捉えられる可能性も否定できない。

そのほうが村落のあり方を考える際にはより納得のゆく面がある。その反対だと、なぜ、1646年頃に新設された村が27年後に廃村になったのか、その程度の期間で村落が新設されたり、廃されたりせねばならない理由はなんであったのか、どうにも理解しがたい。とはいえ、専門外のことなので、その点に関しては二つの史料の関係や信憑性の問題なども含めて、今後の歴史研究に待つかないであろう。

いずれにせよ、前田村の廃された時期については、従来のような見方だけでなく、その反対の見方の成立しうる可能性も残されている。一応、両者念頭に置いて、今後の考究がなされるべきであろう。

ところで、現在の本集落への移動の時期に関しては史料でも手がかりが得られないし、伝承でも「移動し合併した」とするのみで、その時期を明らかにしていない。また、仲松も平坦地に移動したゴバン型集落であるが、その時期は不明であるものの例として屋嘉を挙げている（仲松1963:155）。仲松は移動時期の明らかなゴバン型集落はすべて1737年以降のものであるとしているので、屋嘉の場合もそれに準じて考えることができるであろう。

ただ、1737年以前に屋嘉が移動していた可能性もまったく否定してしまうのではなく、柔軟な対応の余地も残しておきたい。というのも、『琉球国由来記』の記載事項と伝承で遡及しうる資料との間にはきわめて高い整合性があり、その点の解釈の仕方によっては移動時期の見方にも影響が及ぶと考えられるからである。屋嘉のみの事例で云々ということではなく、今後の追求課題としてとっておきたい。

伝承村落史との文献村落史とを突き合わせ整理すると、屋嘉の村落史とりわけ統廃合と移動に関しては次のようになる。

- ① 村落の発生の時期は明らかでないが、『絵図郷村帳』（1646）には屋嘉と前田の2カ村が記されている。
- ② 1635年から1648年の間に成立されたとされる『琉球国高究帳』では前田が記されておらず、屋賀村のみが記載されている。
- ③ 『琉球国高究帳』の成立年代が『絵図郷村帳』よりも前か後かによって、恩納間切創設（1673年）以前に既に前田村が廃されていたか否かは捉え方が異なってくる。その点は今後の課題になる。
- ④ ゴバン型集落の発生に関する仲松説によれば、屋嘉も1737年以降の平坦地への移動集落と考えられる。
- ⑤ 仲松説を承知の上で、『琉球国由来記』（1713）の当時すでに移動していた可能性も否定はせず、今後の考究課題にしたい。

2. 聖地と旧家

(1) 御 嶽

村落の移動および併合に関する伝承で記したように、かつてのヤカの御嶽がアガリウガミ（東拝み）ないしアガリウタキ（東御嶽）であり、メダの御嶽がイリウガミ（西拝み）ないしイリウタキ（西御嶽）であるとされている。屋嘉の御嶽はそれら以外にはない。また、『琉球国由来記』や『琉球国旧記』にも屋嘉村の御嶽は二つ記載されているだけなので、数の上では文献ともびつたり合うことになる。

両御嶽とも、小高い丘の上にあり、登り口には鳥居が建てられている。カミンチュ（神人）またはムラガミ（村神）と呼ばれる司祭たちが特定の年中祭祀のたびに儀礼を執り行い、拜んできた場所には、コンクリートの建物が建てられている。そして、中には香炉が置かれている。その建物の向きを御嶽の向きと見なせば、東御嶽も西御嶽も本集落に向いていることになる。つまり、東御嶽は西南西向き、西御嶽は南向きである。

コンクリートの建物に変わったのは両御嶽とも13年前のことである。鳥居が建ったのはさらにその4年ほど前のことである。建物は御嶽をきれいにする意味で、屋嘉区の予算で建設された。鳥居は個人の寄付によるものである。

コンクリートの建物が建っている場所には、両御嶽とも以前小さな祠があった。東御嶽の祠はアワイシ、西御嶽の祠は珊瑚の平石で造られていた。双方とも高さは1メートルくらいで、屋根にはトタンがかぶせられていた。また、双方とも祠の中には石を削って作った小さな香炉が一つ置かれているだけであった。祠の向きは現在と同じであった。御嶽に左縄を張り巡らした記憶はないとのことである。

東御嶽が現在地にどこからか移動してきたとの話は聞けない。が、昔の西御嶽は現在地よりも西側の低地にあったとされている。そこに昔のマエダムラがあったとされている。その近くに今日では「支那事变以来第二次世界大戦まで」の戦没者の慰霊碑が建てられている。理由は不明であるが、西御嶽は明治30年代に現在地に移されたとされている。

ところで、『琉球国由来記』には屋嘉村の御嶽として下記のとおり記載されている。

	ヨリブサノ嶽	屋嘉村
御 名	アカウズカサノ御イベ	
	底 森	同 村
神 名	コバズカサノ御イベ	

これらが今日のどの御嶽に相当するかについては、13年前の改修の際に当時の区長を中心に判断がなされた。東御嶽の建物の入り口にはヨリブサノ嶽、西御嶽のそれには底森と刻まれたのである。

何故そのように判断されたのであろうか。関係者によれば、当時、御嶽の名称や神名について伝承されているわけではなかった。つまり、土地の人々の口碑伝承のレベルでは東西の二御嶽が『琉球国由来記』のどの御嶽に相当するかの確実な証拠はなかったのである。

『琉球国由来記』ではヨリブサノ嶽の「御名」は「アカウズカサノ御イベ」であり、底森の「神名」は「コバズカサの御イベ」である。当時、東御嶽にはアコウ、西御嶽にはクバが生えていたわけでもなかった。敢えていえば、双方にクバが生えていた。したがって、それらの植物を根拠にして、判断することもできなかった。

そこで、判断の材料にしたのが御嶽周辺の地形であった。東御嶽は昔から小高い丘の上にあった。それに対して、西御嶽は低い窪地にあった。窪地にある御嶽こそ『琉球国由来記』の「底森」であろうと考えたのである。そうすると、残る一つは自動的に決まりということになったようである。

御嶽が本来いかなる聖地なのかという点に関して、実に興味深い話が聞けた。明治42年生の前田松次氏は、現在生きておれば、150歳余の古老から17歳のときに昔のことをいろいろと教えてもらった。その中の一つに、屋嘉の御嶽は祖先たちの風葬所で、その御骨は全てマジリバカに移されたという話がある。

(2) 根 屋

集落の東よりの位置にニーヤー（根屋）と称される祭場がある。それは前章に述べたとおり、昭和55年に解放された区域に入っていて、現在地に復元されるまでに曲折があったし、名称も戦後変わっているし、さらに祭場としての性格もいささか曖昧な面がある。戦前も戦後も地所の所有は区有・字有になっている。

戦前のニーヤーは今日の位置よりも20メートルほど東寄りにあった。そこには木造の建物があり、中には火の神を表す三つの石と二つの香炉が置かれているだけであった。戦前はその建物をトゥンチグー（殿内小）と呼んでいた。

トゥンチグーの前の広場はカミサギと呼ばれた。ヤンバル（沖縄本島北部）の村々で普通カミアサギないしカミアシャギと呼ぶ村落の祭場である。カンサギの場所や名称はもはやそうとうの高齢者でないと分からなくなっている。同じ敷地内に区事務所や共同売店などがあって、まさに屋嘉の中心地であった。

米軍に接収された後は、昭和22年に解放されたウフカーと同じ敷地に仮のニーヤーが建

てられた。そして、昭和57年に現在の地の再建されたのである。その際に、戦後の宅地の線引きが原因で、戦前の位置よりも少し西にずれたのである。

村人はニーヤーの性格や再建までの経緯を簡潔に次のように石碑に刻んでいる。ただし、碑文は縦書きである。

屋嘉村の開闢当時火種を保管し村人が火種を分けあったところが根屋（トンチ小）であった。

その後、字民は根屋を火の神として建立し、字民全体の守護神として祭ったところである。

第二次世界大戦後仮根屋として14番地に建立され、昭和57年4月に現在の場所に再建された。

この碑文の14番地とはウフカーのある場所である。「根屋」と記して、その後にわざわざ「トンチ小」とした点には注意が必要であろう。戦後、トゥンチグラーという名称からニーヤーに変わり、伊芸ノロが屋嘉まで来なくなって、カミサギの祭場として意義が薄れ、忘れ去られ、逆に火の神と火種伝承が大きくクローズアップされたものと考えられる。

私の理解では根屋ないしトンチ小は根神の火の神であると思われる。なぜなら、『琉球国由来記』で「神アシアゲ」と対等の扱いで記載されている「根神火神」をそこ以外に特定するのは不可能だからである。また、神アシアゲについては「伊藝巫、祭祀也」とし、根神火神については「屋嘉根神、祭祀也」とする記述も伝承とびったり一致するからである。

(3) 拝 泉

戦後、飲料水その他の生活用水は水道にとって代わられたが、戦前のはもっぱらウフカー（大井）の水を使った。また、生まれたばかりの赤子を浴びせるウブミジ（産水）や正月元旦未明のミーミジ（新水＝若水）および死者を浴びせる水もウフカーから汲んだ。

ウフカーは屋嘉全体のカーであるが、戦前まではカードー（川堂）という家の屋敷内にあり、管理もその家でやっていた。たとえば、旧6月25日に司祭や婦人たちがウフカーを拝む行事があるが、その際にあらかじめきれいに掃き清めるのは、その家の役目であった。カードーはウフカーバタ（大川端）と呼ばれる家のヤータッチャー（分家）で、戦後廃絶した。そのため、今日ではウフカーの管理を屋嘉区が行っている。

戦前だと旧6月25日の午後には毎年綱引があった。戦後は1968年に一度行われただけで

ある。綱引の前に（たいてい午前中ということになるが）、一年に一度のカーウガミ（井泉拜み）も行われていて、このほうは今日でも続いている。

カーウガミにはムラの代表としてカミンチュ（神人＝司祭）が行うものと一般の婦人たちが行うものがある。神人はムラのカーとしてウフカーとイヌシマの下方にあるユンダガーと称する井泉を拜む。ムラのカーとして二カ所を拜むのは一般の婦人たちもまったく同じである。

ただし、一般の婦人たちは「自分の親元のカー」や「夫の側のカー」も拜む。東御嶽の近辺にはヤカドゥンチ（屋嘉殿内）のトゥンチガー（殿内井泉）、ウフヤ（大屋）のウフヤガー（大屋井泉）、シール（勢頭）のシールガー（勢頭井泉）があり、またかつての西御嶽の下方にもメーダ（前田）のカーがある。一般の婦人たちが「自分の親元のカー」を拜むというのは、たとえば実家が屋嘉殿内のヒチ（系統）ならば殿内井泉を拜むというように、それぞれの実家のヒチの井泉を拜むということである。「夫の側のカー」にしてもその点は同じである。古老たちが物心ついてからこの方、カーウガミは女性だけでやっているとのことである。

ユンダガーは屋嘉と前田が合併する以前のヤカムラのカーであったといわれている。一方、メーダムラのカーは西御嶽下方のカーであったとされている。上述のとおり、御嶽に関しては東御嶽も西御嶽も村落レベルの聖地になっている。が、拝井泉に関してはヤカムラのもだけが村落祭祀の対象となっていて、メーダムラのはかつてのメーダムラの成員とされるメーダビチ（前田系統）だけの祭場になっている。その点を少し強調すると、村落祭祀の側からは対等合併ではなく、ヤカムラに重点のかかった合併になっているといえる。

ただし、ユンダガーはムラのカーとしての性格のみを有しているわけではないので、若干注意が必要である。ユンダガーはウフカーバタ（大川畑）のカーでもある。すなわち、ヒチという点からみるとユンダガーは大川畑系統の拝井泉なのである。戦前、ウフカーを管理していたカードー（川当）はウフカーバタ（大井畑）の分家であり、またウフカーはその屋敷内にあった。それとも重ね合わせると、ムラのカーと大井畑の深い関係が出てくる。

（4）世界報神と鍛冶屋跡

現在の西御嶽の下方にユガフガミ（世界報神＝豊饒の神）を祀っているとされる祠がある。祠に向いて右側つまり南側に火の神、左側に香炉が置かれている。土地は区有になっていて、戦前はムラ全体で祀っていたが、戦後前田門中だけで祀るようになった。ただし、最近になって、再びムラに返還された。モノシリ（物知り）の関与のあったことがはっ

きりしているが、詳細は割愛したい。

世界報神のさらに下方に、龕を祀った祠があるが。伝承では旧家前田の次男筋が鍛冶工であった。そこも土地は区有になっていて、祠の横に刻まれた文によれば、祠の建設にも屋嘉区が関与している。参考までにそれを掲げておきたい。原文は縦書きである。なお、文中の龕祭は現在では行われていない。

(5) 旧 家

村落祭祀の儀礼施行者たるカミンチュの継承や村落レベルの祭場に深くかわる旧家は四つある。ヤカドゥンチ（屋嘉殿内）、ウフヤ（大屋）、ウフカーバタ（大川畑）メーダ（前田）である。カミンチュの継承に関しては次章にゆずることとし、ここでは戦前の集落における旧家の位置について簡単に触れておきたい。

四つの旧家の占める戦前の集落内の位置は、おおむね中央部の最も北側で、西御嶽とウフカーの間辺りということになる。この旧家の配置の仕方は、二つのムラの移動・合併に際して、集落中央の最も奥まった区域にわざわざ位置づけたと解される。そして、四つの旧家をクサティ（腰当て）にして、東、西、南に分家群が展開する構図をなしていると受け取れる。

旧家と合併前の二つのムラとの対応関係をみると、既に述べているように、屋嘉殿内、大屋、大川畑はヤカムラ、前田はメーダムラにあったとされている。これらの配置を見ると、移動合併に際して、旧家を中央部の最も奥まった区域に配するにしても、旧ヤカムラと旧メーダムラの地域的な構成も考慮されていたように思われる。

旧6月25日の綱引には西御嶽の入り口から集落内を南北に走る道筋の一つ東側の道を境にして、村人をアガリ（東）とイリ（西）の二組に分けた（地図2参照）。屋嘉殿内や大屋・大川畑などのヤカムラの旧家は全て東組に属することになる。そして、西はメーダムラの前田だけということになる。この区分は偶然ではなく、二つの村落の移動・合併に際して、旧村落を無視せずに、地域構成に反映させたものと解される。前田姓は集落の西半

鍛冶屋

今から約一五〇年前屋嘉村所有として建立

当時鍛冶工金細工祖先孝徳より五代目最初鍛冶工前田平吉

此の間鍛冶工後継者がいないため
那ハ宮良氏泡瀬ニヨ一氏外数名による後続

鍛冶工 前田久六

“ “ “ 前田幸吉

一九四四年日米戦にて破壊

一九六六年十二月再建立竣工

鑄寄贈伊芸修

龕祭は毎年旧十一月七日

一、金式拾弗区より補助金

当時区長前田徳信

分にほとんど居住しているとする土地の人々の説明は、歴史的な事実がどうであろうが、本集落の地域構成に関する土地の人々なりの捉え方を示している。

ところで、これまで「何々門中」という用語と「何々ビチ」という用語の両方を用いて記述してきた。それに関して若干記しておきたい。

84歳の話者によれば、「門中」という用語を屋嘉で使いだしたのは比較的最近のことである。少なくとも、その話者の若い頃は余り耳にしなかった。そして、その話者よりも上の世代の者から昔は屋嘉で門中という用語を用いたことはなかったとはっきり聞いた。

その話者が若い頃、今日の「門中」と同じ意味あいを用いていたのは、「ヒチ」であった。今日でも70代以上の年寄りならば、後者を使用しているとのことである。たとえば、ウフヤビチ、メーダビチ、ヤカドゥンチビチ、ウフカーバタビチという具合である。今日、何々門中というのはこのようなかつてのヒチを門中に変えたものであるという

なお、その話者は門中というと、カミグトゥ（神事）すなわち祖先ゆかりの地を成員が拝み廻る門中拝みを連想するとのことである。また、同じ父系の系統であるということを表現する際には、かつては「ヒチ・ハラ」であるといったとのことである。

『金武町誌』には資料として「屋嘉の門中一覧表」が掲げられている（金武町誌編集委員会 1983:666）。参考までに、本稿にもそれを掲載しておきたい。

表1. 屋嘉区門中一覽

門 中 名				氏 名				屋 号				
前	田	門	中	前	田	孝	徳	カ	ン	ゼ	ー	ク
川	畑	門	中	仲	間	森	男	大		川		畑
川	堂	門	中	岡	村	洋	一	大				堂
カ	ン	ジ	ャ	神	里	新	栄	カ	ン	ジ	ャ	ク
シ	ー	ル	門	仲	間	辰	次	仲				道
知		念	門	知	念	惣	憲	安		里		小
大		屋	門	吉	野	松	一	大				屋
大		城	門	大	城	栄	昌	大				城
ア	サ	ギ	ジ	宮	城	健	清	ア	サ	ギ	ジ	ヨ
ナ	ー	カ	門	伊	芸	健	優	ナ		ー		カ
屋	嘉	殿	内	金	城	豊	茂	ヤ	カ	ド	ン	チ
ウ	ン	ナ	小	島	本	源	良	ウ	ン	ナ		小
ト		ー	門	伊	芸		豊	ト		ー		小
ク	ラ	ン	ト	前	田	照	範	ク	ラ	ン	ト	ー
ク	ラ	ニ	ー	大	城	光	男	カ	マ	ク	ラ	ニ
メ	ー	ベ	ー	前	田	元	松	メ	ー	ベ	ー	ー
ツ	ハ	ナ	ク	仲	村	善	太 郎	ツ	ハ	ナ		ク

屋号覧の屋号と門中のムートゥヤー（元屋＝宗家）、氏名覧の氏名は宗家の当主のこと
 のようである。

3. 神人と年中祭祀

(1) 神 人

カミンチュ（神人）すなわち村落レベルの年中祭祀の儀礼施行者が二人いる。二人とも女性で、ニガミ（根神）と称している。ただし、そのうちの一人は健康上の理由で、現在祭祀儀礼に直接携わってはいない。つまり、屋嘉の村落祭祀はからくも一人の根神によって儀礼が執り行われている状態である。その根神は教えて65歳になる仲間磯子さんである。ちょうどニーヤーが現在地に再建された年に根神になったので、今年で11年目になる。前の根神が亡くなった後、後継者だといわれながらも8年間は拒み続けた。が、それでは村のため、家のため、本人のためによくないとのことで、ついに、意を決し、根神になったとのことである。

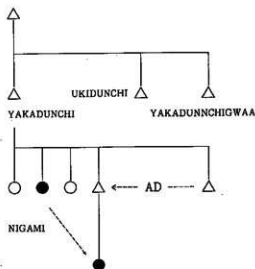
その根神の役は屋嘉殿内門中で代々継承されるべきものであるとされている。仲間さんは屋嘉殿内の娘で、その前任者も同様であった。仲間さんの父の父は屋嘉殿内の三男で、分家して屋号をヤカドゥンチグラー（屋嘉殿内小）と称した。父はその次男であった。屋嘉殿内に女の子しかできなかったので、父が3歳のとき養子になった仲間さんは屋嘉殿内で生まれ、そこの娘として前任者、すなわち父方オバより根神の役を継いだのであった。（図1参照）

健康上の理由で祭祀行事には参加しないが、もう一人70歳くらいになる根神がいる。その根神の前任者は母の母で、クラントーという家に生まれ、ユナニーという家に嫁いだ。母親は前任者の3女で、ターヌハタ（田ヌ畑）という家に嫁いだ。前根神の生家は前田門中で、母親の嫁ぎ先すなわち現根神生家は前田門中ではない（図2参照）

数年前に男性の神人であるニツチュ（根人）亡くなった。その根人はアガリウファ（東大屋）のワカレ（分かれ＝分家）であるメーウファ（前大屋）の主人であった。その前任者は東大屋のムトゥ（元＝本家）である大屋の主人であったという。（図3参照）

いわゆるモノシリの影響で、継承の仕方にゆれも認められるが、大筋では重要な司祭を

図1. 根神 A の継承



AD: 養子

EGO: 話者

△の下にローマ字は屋号

出す家もないし系統がつかめる。カミンチュの後継者は「ユタやサンジンソウが決める」ものであるから、特定の旧家や門中に関係なく、誰がなってもいいとする意見がある一方で、屋嘉殿内は根神、大屋は根人を代々出してきたし、これからも出すべきであるとする考え方も根強い。それに比べて、前田の家ないし門中からもう一人の根神が出るべきであるとする考え方は必ずしも強いものではない。が、村落成立の背景からすれば、かつて前田から根神が代々出ていたと考えても不自然ではない。むしろ、その方が仲松説との絡みでは理解しやすい。ちなみに、昭和20年頃、前田門中のある男性が以前は前田からも根人が出ていたとの理由で、根人に就任する動きがあったようである。理由ははっきりしないが、結局根人に就任するまでには至らなかったとのことである。

(2) 年中祭記

屋嘉殿内の根神がムラガミ（村神＝村落の司祭）として一人で拜みを行っている年中祭記は、4月吉日のアブシバレー（睦払い）、5月15日と6月15日のウマチー（御祭）、6月25日のカーウガミ（井泉拜み）、8月10日のトゥカウガミ（10日拜み）である。これら以外に記憶にあるものを尋ねても一つの祭祀も挙がってこない。また、伊芸ノロがカミサギまで来て儀礼を行ったこと

についても、話は聞いたことがあるが、実際に目撃したとする話者には会えなかった。

どの祭祀にどの祭場をどういう順序で廻るかにについて簡単に記しておきたい。アブシバ

図2. 根神の継承

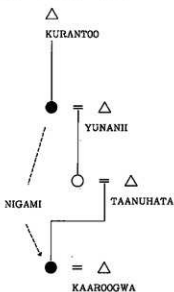
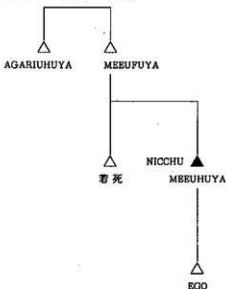


図3. 根人の系譜



* 父の前の根人はウフヤの主人

レーは4月14日と15日にわたって儀礼が行われる。14日にはニーヤー、東御嶽、西御嶽の順で拝み、翌日アブシバレーが行われることを報告する。15日は区の役員が田の畦で捕ってきた虫をニーヤーに供える。その後、前の浜に行き、約40cmくらいのもで作った舟に虫をのせて流す。

5月も13日と15日に拝む。13日にはニーヤー、東御嶽、西御嶽の順で拝む。15日はニーヤーだけである。6月は15日にだけニーヤーで拝む。6月25日にはニーヤー、東御嶽、ユンダガー、西御嶽、ウフカーの順で拝む。8月はニーヤー、東御嶽、西御嶽の順である。既述のとおり、昭和の初め頃までは9月9日にムラガミで世果報神を拝んでいたとされている。

6月25日の綱引の際には、東組と西組に分けた。東組はウージナ（雄綱）で、西組はミージナ（雌綱）であった。雌綱が勝てば翌年はユガフー（世果報＝豊年）になるとされて、雄綱が勝てばガシ（餓死）するといわれた。どういうわけか、たいてい雌綱が勝っていたという。東組から西組に嫁いだ女性は引くふりをして、反対に押した。もちろん、西組から東組に嫁いだ女性も同じであったという。

ところで、『琉球国由来記』の金武間切の年中祭祀の条には、次のように屋嘉の祭場として「根神火神」と「神アシアゲ」が分けて記され、それぞれにおける祭祀が記載されている。

根神火神

屋嘉村

山留ニ竹木伐故、為₂作物₁、崇祈之時、仙香、花米九合、
麦神酒二器（百姓中）

稲穂祭三日崇之時、仙香、五水二合、花米九合（屋嘉大屋子）、
仙香、花米九合、麦神酒二器（百姓中）

年浴之時、仙香、花米九合、神酒二器（同上）

ミヤ種子之時、仙香、花米九合、神酒之器（同上）供之。

屋嘉根神、祭祀也。

神アシアゲ

同 村

稲穂祭之時、シロマシ四器、麦神酒三（百姓中）五水二合
（屋嘉大屋子）

同大祭之時、五水二合（同上） 神酒四、赤飯二器（百姓中）

柴指之時、神酒三（百姓中）供 之。

伊芸巫、祭祀也。

既述のとおり、根神火神は今日のニーヤーに当たると思われる。そこには山留に竹木を伐る故の崇祈、稲穂祭三日崇、年浴、ミヤ種子が記載され、最後に「屋嘉根神、祭祀也」とされている。また、神アシアゲには稲穂祭、同大祭、柴指が記され、最後に「伊芸巫、祭祀也」とされている。つまり、祭祀者に関する限り、根神火神と神アシアゲはきちんと区別されている。しかも、それは、今日の調査結果ともびったり一致する。土地の人々によれば、伊芸ヌルは屋嘉のカミサギで礼儀を執り行ったのであり、ニーヤーには入りもしなかったという。

このように、根神火神と神アシアゲがそれぞれ根神と巫に対応しているのに対して、御嶽のほうの祭祀者は曖昧な記述になっている。屋嘉の二つの御嶽にて山留に竹木を伐る故に崇祈を行うことが記され、加えて「屋嘉根神ニテ祭祀也」とされている。ところが、それだけにとどまらず、さらに重ねて伊芸の三つの御嶽も含めて、「右五カ所、伊芸巫崇所」ともされているのである。

伊芸ヌルは五月ウマチーなどに屋嘉のカミサギで儀礼を執り行ったとされ、御嶽どころか、ニーヤーにも入らなかったと伝えられている。換言すれば、屋嘉の御嶽における祭祀を伊芸ヌルが掌握していたとする伝承は、どうしても聞けない。その限りにおいては、屋嘉も複数の村落を祭祀領域とするヌルがその領域内の村落であっても、他所の村落の御嶽祭祀にはかかわりをもたず、反対にその根神が御嶽祭祀を掌握している事例を提供している（津波 1990 第4章参照）。にもかかわらず、『琉球国由来記』では屋嘉の御嶽を「伊芸巫崇所」でもあるとしている。屋嘉の事例は、この場合の「崇所」がそこにおいて実際に祭祀儀礼を執り行っていることを意味するものではなく、もっと別の解釈が必要であることを語ってくれているのである。



写真1 大平洋を望む本集落



写真2 シナマタバル風景



写真3 東御嶽（真ん中の森）と上の島故地（御嶽背後）



写真4 ユンダガー（水はない。平成3年度のカー搾み）

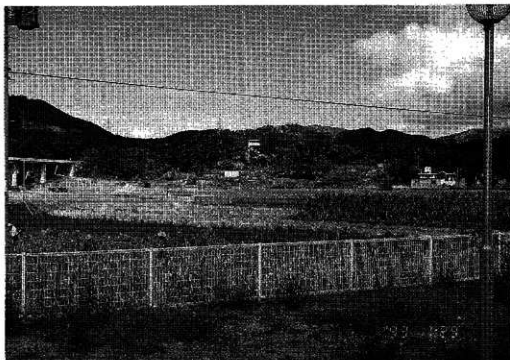


写真5 旧前田村の故地（写真中央部）

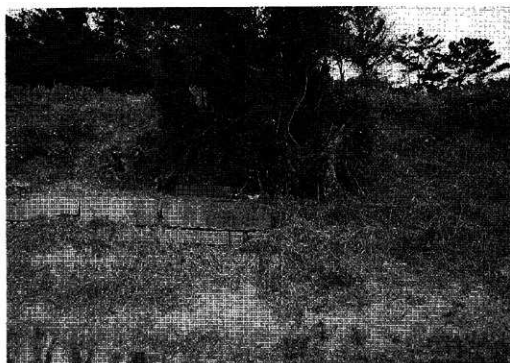


写真6 メーダカー（前田井泉）

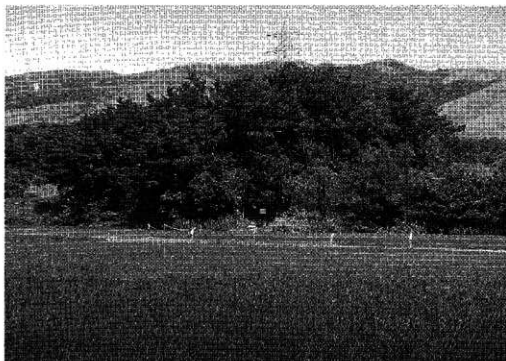


写真7 東御嶽全景

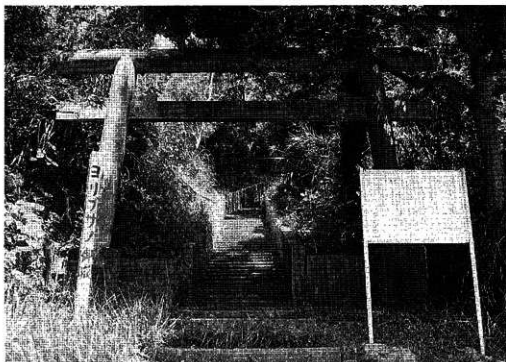


写真8 東御嶽入り口



写真 9 東御嶽の建物

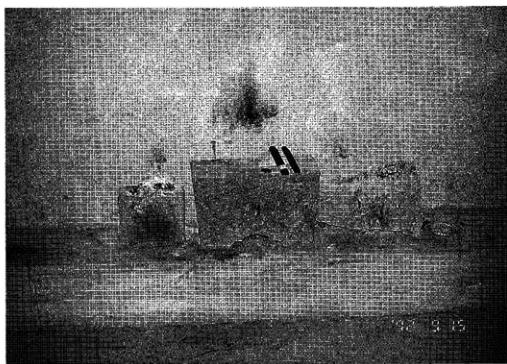


写真10 東御嶽の香炉

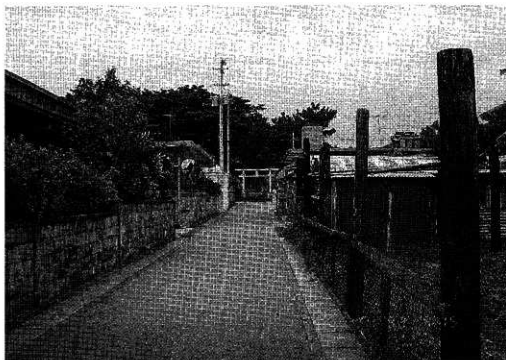


写真11 西御嶽全景



写真12 西御嶽の故地（中央慰霊の塔付近）



写真13 西御嶽の建物

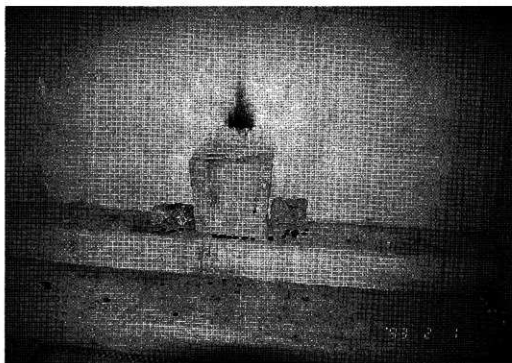


写真14 西御嶽の香炉

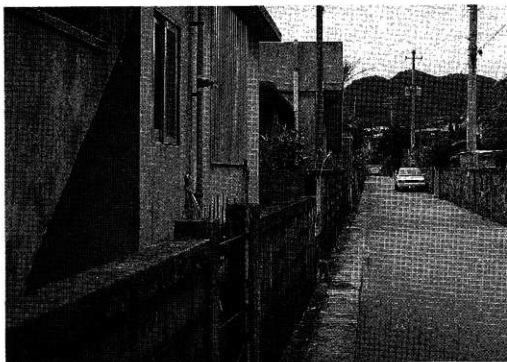


写真17 本集落アガリの風景

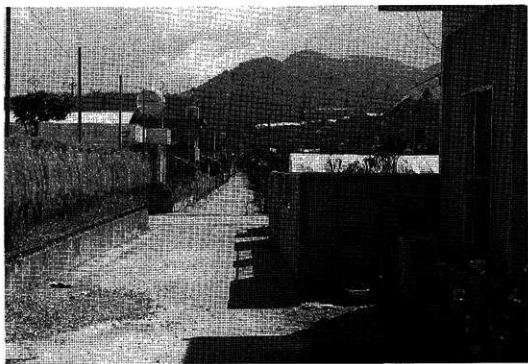


写真18 本集落イリの風景

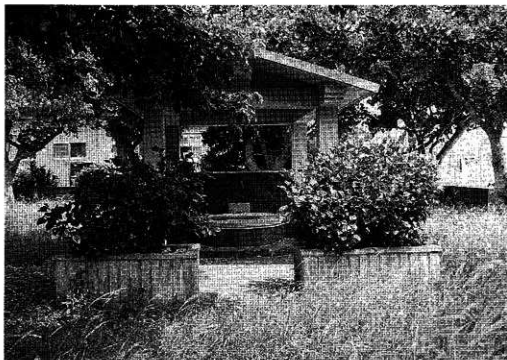


写真19 ウフカー（大川）



写真20 ウフカーの香炉



写真21 根 屋

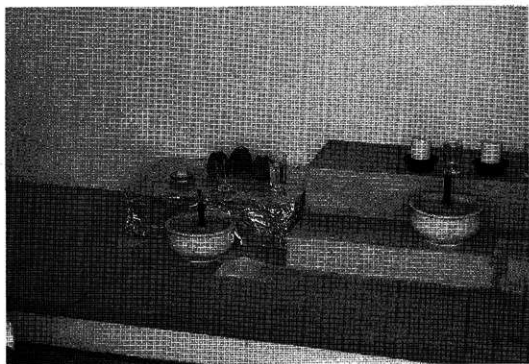


写真22 根屋の火の神と香炉

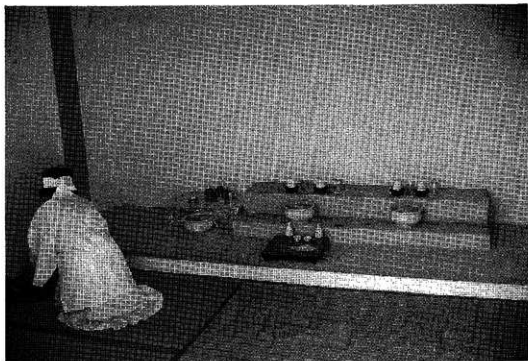


写真23 根神による根屋での拝み（5月ウマチー）の準備



写真24 根神による根屋での拝み（5月ウマチー）



写真25 根神建立記念碑

引用文献

- 稲 福 みき子 1982 津波高志他『沖縄国頭の村落（下）』新星図書
- 梅 木 哲 人 1977 「薩藩統治下の沖縄の農村について」『史潮』新2号
- 沖縄県沖縄史料編集所編
- 1981 『沖縄県史料・前近代1・首里王府仕置』 沖縄教育委員会
- 笠 原 政 治 1991 「歴史の島、島の歴史—沖縄伊平屋島の拝所・伝承・祖先観をめぐる覚書—」『横浜国立大学人文紀要 第一類哲学社会科学』第三十七輯
- 「角川日本地名大事典」編集委員会
- 1986 『角川日本地名大事典 47 沖縄県』 角川書店
- 球陽研究会編 1973 『球陽 読み下し編』 角川書店
- 金武町誌編集委員会編
- 1983 『金武町誌』
- 首 里 王 府 編 1913 『琉球国由来記』（伊波普猷・東恩納寛淳・横山重編 1962
『琉球史料行叢書2』 井上書房
『絵図鄉村模』（沖縄県立図書館東恩納文庫蔵）
- 高 良 倉 吉 1981 「課 題」沖縄県沖縄史料編集所編『沖縄県史料・前近代1・
首里王府仕置』
- 田 村 敏 和 1982 津波高志他『沖縄国頭の村落（下）』新星図書
- 津 波 高 志 1990 『沖縄社会民俗学ノート』 第一書房
- 仲 松 弥 秀 1963 「沖縄の集落—平民百姓村の景観的研究—」『琉球大学文学学
部紀要 人文・社会』第7号
- 東恩納 寛 淳 1950 『南島風土記』 沖縄郷土文化研究会

金武町の村落と聖地
－屋嘉区の場合－

発行日 平成4年12月30日
発行者 金武町教育委員会
著者 津波高志
印刷所 巴印刷
石川市字石川戸渡目原2287-2
電話 098-964-2437

1911

Blank page with faint horizontal lines and a date stamp in the top right corner.